

防災学習の成果、世界に発信

11月25、26日に高知県黒潮町で行われた「世界津波の日」高校生サミットin黒潮」には、日本からも東日本大震災の被害を受けた若手・宮城・福島3県をはじめ、全国38校116人の生徒が参加した。世界から集まった高校生と共に、分科会やフィールドワークなどを通して津波や自然災害について学び、防災・減災に向けた今後の取り組みを協議した。

(一面参照)

「世界津波の日」高校生サミットin黒潮



課題研究の成果を英語で発表する日本の生徒。日本の取り組みに海外生徒も大きな関心を寄せる

中土佐町で行った調査結果を報告。いずれの地域も標識が少なく小さい、避難経

分科会は、「リスク」の理解「備え」「復元」の三つのテーマと、それぞれ6〜7の国や県がグループをつくって協議。各学校が取り組んでいる津波や自然災害に関する研究の成果、地域での活動などについて発表し、防災情報やテーマに、

大阪教育大附属 高校平野校舎

観光客対応の防災地図を提案

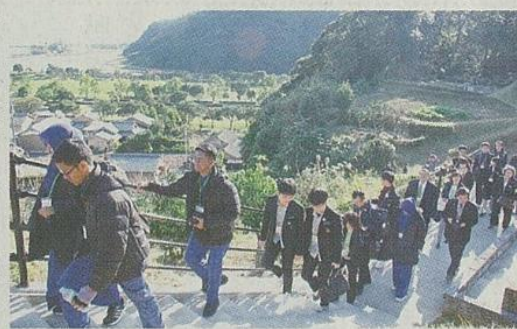
宮城 志津川高校

「他者を守る立場へ」意識変容を

宮城県志津川高校の4人は、同校における防災教育の内容を紹介し、震災を経験したとにより、各活動に防災意識の高揚が感じられる、外部団体の働き掛けによって、これまで知らなかった地元の良いところを発見できた、避難訓練を実施。緊急地震速報の後、参加高校

路が十分整備されていない、避難所まで遠いなどの課題があったことから、観光客などが安心して訪問先を楽める新しいタイプのハザードマップの作成を提案した。

宮城県志津川高校の4人は、同校における防災教育の内容を紹介し、震災を経験したとにより、各活動に防災意識の高揚が感じられる、外部団体の働き掛けによって、これまで知らなかった地元の良いところを発見できた、避難訓練を実施。緊急地震速報の後、参加高校



南海トラフ地震では最大34cmの津波が襲うと予想される黒潮町。迅速な判断と避難の重要性を体感

生たちは、黒潮町立上川口小学校の児童の先導の下、コウジン山まで一気に駆け上った。その他にも、同公園内にある津波避難タワー「や」世界津波の日」の起源とされる安政津波の碑の見学、参加者による記念植樹などが行われた。

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校から、地震をテーマに課題研究に取り組んでいる2年生2人が参加した。

分科会の司会も務めた2人は「とても緊張と感じた」と、東日本大震災という大きな災害を経験した日本から積極的に関心を持って発信していくことの重要性を訴えた。

その一方で、記憶の風化が著しく、語り部として活躍する高校生も被災時の低年齢化に伴って本人の記憶に心もとない部分が見られるなどの課題も指摘。高校生として「自己を守る立場から他者を守る立場へ」の意識の変容、南三陸町の取り組みを発見・発信するため可能な限り交流を受け入れることなどを今後の取り組みとして挙げた。

また、フィールドワークでは、地震・津波発生を想定して会場である土佐西南大規模公園体育館から最寄りの避難場所まで逃げる避難訓練を実施。緊急地震速報の後、参加高校

事前にスタディーツアー

和歌山を訪れた海外生徒と防災体験

サミットに先立ち、海外高校生らは23、24日、宮城県と和歌山県に分かれて事前スタディーツアーに参加。和歌山を訪れた海外生徒は16カ国、高校生127人と引率教員らは「稲むらの火」のモデルとして知られる濱口梧陵らによって創立された耐立耐火のモデルとして知を交流した。

同校代表生などの体験型防災スクールの自然災害をゼロにすることは困難だが、もしもの時に的確な行動を取ること、傾けながら、楽しく防災を学ぶ良い機会となった。



互いに声を掛け合いながらバケツリレーをする生徒たち